



劇場文化と社会的共通資本

小金井市にNPO現代座なる劇団がある。2014年から16年にかけて、武蔵野新田開発を成功に導いた川崎平右衛門の協同を重視した思いと活動を「武蔵野の歌が聞こえる」に舞台化し、公演を繰り返した。私も含めてこれを見た有志が、あまりにも知られずにいる川崎平右衛門をもっと多くの人たちに知らしめていこう、また平右衛門の協同の思想を現代に生かしていこう、ということで集まり、17年に川崎平右衛門顕彰会・研究会を立ち上げてもある▼「武蔵野の歌が聞こえる」をはじめ、現代座が行う演劇の脚本・監督を担うのが現代座代表の木村快さんである。快さんは演劇と劇場とは区別して考えるべきだという持論をもつ。演劇は俳優が観客に演技を見せて楽しませるものであるのに対し、劇場は同じ空間の中で俳優の演技をとおして俳優と観客とが一体となって共感・感動するところに本質があるという。この劇場文化を復活させていくことが、演劇にとどまらず、現代社会の大テーマである、というのが快さんの基本的考え方だ▼快さんは1936年の生まれで間もなく85歳。快さんの思い・哲学を守りながら現代座のこれからを考える会を昨年立ち上げ、1、2カ月ごとに熱い議論を展開している。先般の会議では、斎藤幸平著『人新生の「資本論」』の話から社会的共通資本の話となった。そこで意見が一致したのが、社会的共通資本は制度的、物的なものだけでなく、コミュニティや共通した思いまで含めて考えられるべきで、むしろ劇場文化こそが社会的共通資本の根幹に求められているのではないか、ということであった。協同組合も事業・理念にとどまらず、そこに集う組合員たちが共感・感動を一つにするところにこそ原点があることを噛みしめ直したのであった。

(土着菌)